

平成 25 年度後期 茨城大学教育学部

内地留学研究報告書

楽しく音楽にかかわりながら音楽活動の基礎的な
能力を身に付けられるようにする学習指導の工夫
—第 1 学年音楽科の段階的なリズム表現の指導を通して—

水戸市立堀原小学校

益子 悦子

楽しく音楽にかかわりながら音楽活動の基礎的な能力を身に付けられるようにする学習指導の工夫

—第 1 学年音楽科の段階的なリズム表現の指導を通して—

水戸市立堀原小学校 益子 悦子

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

現小学校学習指導要領音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」¹⁾となっている。今回の改訂では基本的にはこれまでの理念を引き継いでおり、前学習指導要領の目標と変更はないが、歌唱共通教材の充実、音楽づくりの重視や鑑賞教材における我が国の音楽の充実、言語活動の充実と〔共通事項〕が新設されたことが改善点である。

中でも音楽づくりは、音楽における基礎的・基本的な知識・技能を定着させ、思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習であり、子どもたちが意欲的に取り組む活動である。

また、音楽活動の中で〔共通事項〕を効果的に取り入れることは、思いや意図をもって表現したり聴いたりするために必要な知識や技能を身に付けさせることができる。しかし、その取り上げ方についての研究はまだ不十分である。音楽活動の中でどのように扱っていくか、思いや意図をもって表現したり聴いたりするために必要な知識や技能を効果的に身に付けさせるためにはどのように学習指導を工夫していけばよいのか、試行錯誤の状態である。

(2) 児童の実態から

小学校に入学して間もない第 1 学年の児童は、音楽経験が浅く、音楽的な能力の個人差があまり大きくない。歌や楽器の演奏に苦手意識もなく、楽しく活動している。この時期に、基礎的・基本的な学習内容の指導を工夫することにより、音楽活動の基礎的な能力を身に付けさせ、今後続いていく音楽学習において、興味・関心をもち、主体的に取り組もうとする児童を育成することができると考える。

神原は、「エミール・ジャック＝ダルクローズは、『リズムが音楽の最も重要な要素であり、音楽におけるリズムの源泉はすべて、人間のからだの自然なリズムに求めることができる』という前提に基づいた音楽教育へのアプローチをしている。子どもが音楽に合わせて体を揺らしたり、足を使って床でビートを刻んだり、アドリブで手をたたいたりすることは自然なことである」²⁾と述べている。音楽の要素のうちでもリズムは、最も人間の動きの中で自然な体の動きであり、小学校音楽教育の導入に、最も重要視されるべき内容である。リズム表現の活動を工夫し、それを多く取り入れることにより、自らのリズムの感覚を鋭敏にするとともに、他と合わせようと努めることにより、聴き取る力も育てることができると考える。

2 研究のねらい

音楽づくりにおいて、段階的なリズム表現の活動の工夫をすることにより、楽しく音楽活動に取り組み、基礎的な音楽表現の能力を育てる学習指導の在り方を究明する。

3 研究の仮説

[共通事項]の指導を音楽活動の中で効果的に取り入れ、リズム表現に焦点を当てて段階的に音楽づくりを行うことによって、興味・関心を高めながら基礎的な表現の能力を身に付けることができるであろう。

4 研究の内容

(1) 基本的な考え方

① [共通事項]とは

小学校学習指導要領の音楽科において、表現と鑑賞の活動の支えとなる[共通事項]について、表現と鑑賞の活動を通して指導するアとイの事項を、井上は下の表にまとめている。³⁾

ア 音楽を形づくっている要素のうち次の（ア）及び（イ）を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取ること。		
	（ア）音楽を特徴付けている要素	（イ）音楽の仕組み
低学年	音色，リズム，旋律，強弱，拍の流れやフレーズ	反復，問いと答え
中学年から加わる要素	音の重なり，音階や調	変化
高学年から加わる要素	和声の響き	音楽の縦と横の関係

イ 音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について，音楽活動を通して理解すること。

○ ♩ ♪ ♫ ♬ ♧ ♨

♫ ♪ ♩ ♫ ♬ ♧ ♨ 五線と加線 | ||

♯ ♭ ♮ *f* *mf* *p* *mp* ∨ (プレス)

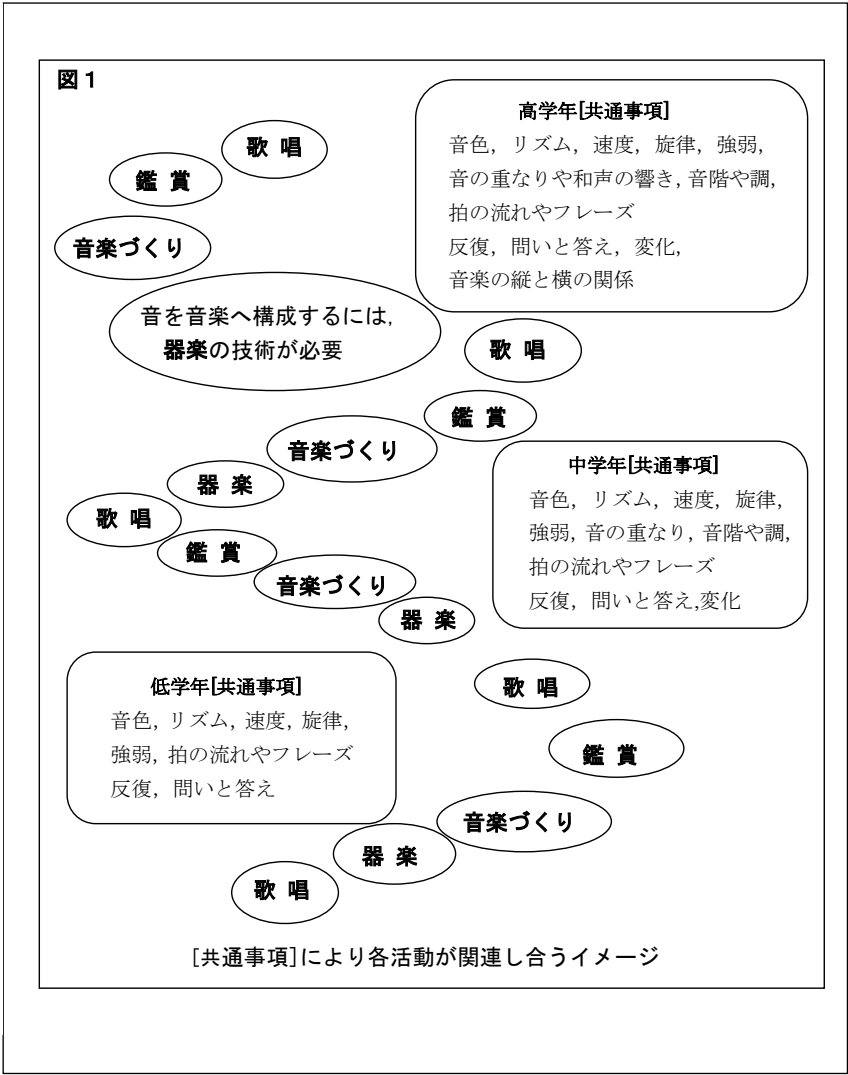
$\frac{2}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{6}{8}$ < >

|| (反復記号) 1. 2. || (反復記号)

⏏ (タイ) ⏏ (スラー) > (アクセント) ⏏ (スタッカート) ♩ = 96

〔共通事項〕は、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の様々な音楽活動に関連させながら学年の目標の実現をめざすための支えとして示されている。

今村は、歌唱・器楽・鑑賞との懸け橋となる各学年における〔共通事項〕の内容を、右のように図1に表している。⁴⁾ このように、それぞれの発達段階に応じて、〔共通事項〕と各活動と関連し合い、スパイラルに様々な活動を行うことにより、目標の実現を図ることができる。



② 音楽づくりとは

今村は、音楽づくりについて、アとイの指導事項を次の表にまとめている。⁵⁾

学 年	A 表現 (3)音楽づくり ア	A 表現 (3)音楽づくり イ
低 学 年	声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。	音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。
中 学 年	いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること。	音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。
高 学 年	いろいろな音楽表現を生かし、様々な発想をもって即興的に表現すること。	音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること。

本研究では、これを踏まえて、リズム表現の次の4つのことができるようにすることを目標とする。

ア 四分の四拍子のリズム 3拍分で「3音の言葉」「5音の言葉」の言葉遊びができるようになること。

イ 四分の四拍子 3 小節分のリズムを身近な生活の中から題材を設定し，作ることができるようになること。

ウ 作ったリズムをつなげたり重ねたりすることができるようにすること。

エ 身近なものを楽器にしてそれら作ったリズムを演奏することができるようになること。

③ 基礎的な音楽表現の能力とは

小学校学習指導要領解説の音楽編には、「音楽活動の基礎的な表現の能力」に関連する内容として，次のことが示されている。⁶⁾

ウ 音楽活動の基礎的な能力を培うこと

「音楽活動の基礎的な能力」とは，生涯にわたり児童が楽しく音楽とかわかっていくことができるよう，小学校の段階ではぐくんでおきたい表現及び鑑賞の活動に必要となる音楽的な能力のことを意味している。具体的には，児童が感じたことや心に描いたことを，自らの声や楽器あるいは自らつくった音楽を通して表現することや，音楽のよさや面白さ，美しさを感じ取りながら，想像力を働かせて聴くことができる能力のことを指している。

音楽活動の基礎的な能力を培うためには，児童が楽しく音楽とかわかる活動を通して，音楽の諸能力を経験的に身に付けるようにする必要がある。すなわち，声の出し方や楽器の演奏の仕方に興味を深めながら，思いや意図をもって歌を歌ったり，楽器を演奏したりする能力，工夫して音楽をつくる経験を通して得られる能力や知識，音楽を形づくっている要素を聴き取り，それらのかかわり合いによって醸し出される曲想を感じ取り，音楽を全体的に味わう能力などを，直接的な音楽体験を通して身に付けるようにすることが大切なのである。

音楽活動においては，児童が本来もっている，音や音楽を聴いたり表現したりしようとする能力に働きかけ，児童の様々な可能性を引き出し，育て，高めていく必要がある。そして，児童が友達とともに音楽を楽しみ，音楽の喜びを分かち合うような学習の場を大事にし，生涯にわたって音楽を愛好するための素地となる諸能力を着実に身に付けるようにすることが大切である。

楽しく音楽にかかわる活動を通して，児童が声や楽器あるいは自らつくった音楽を通して表現すること，また，音楽のよさや面白さ，美しさを感じ取りながら，想像力を働かせて聴くことができる能力を，経験的に身に付けさせるようにしていくことが大切である。

④ 読譜について

読譜に関しては，低学年では学習指導要領には次のように記載されている。⁷⁾

A(1) ア 範唱を聴いて歌ったり，階名で模唱したりすること。

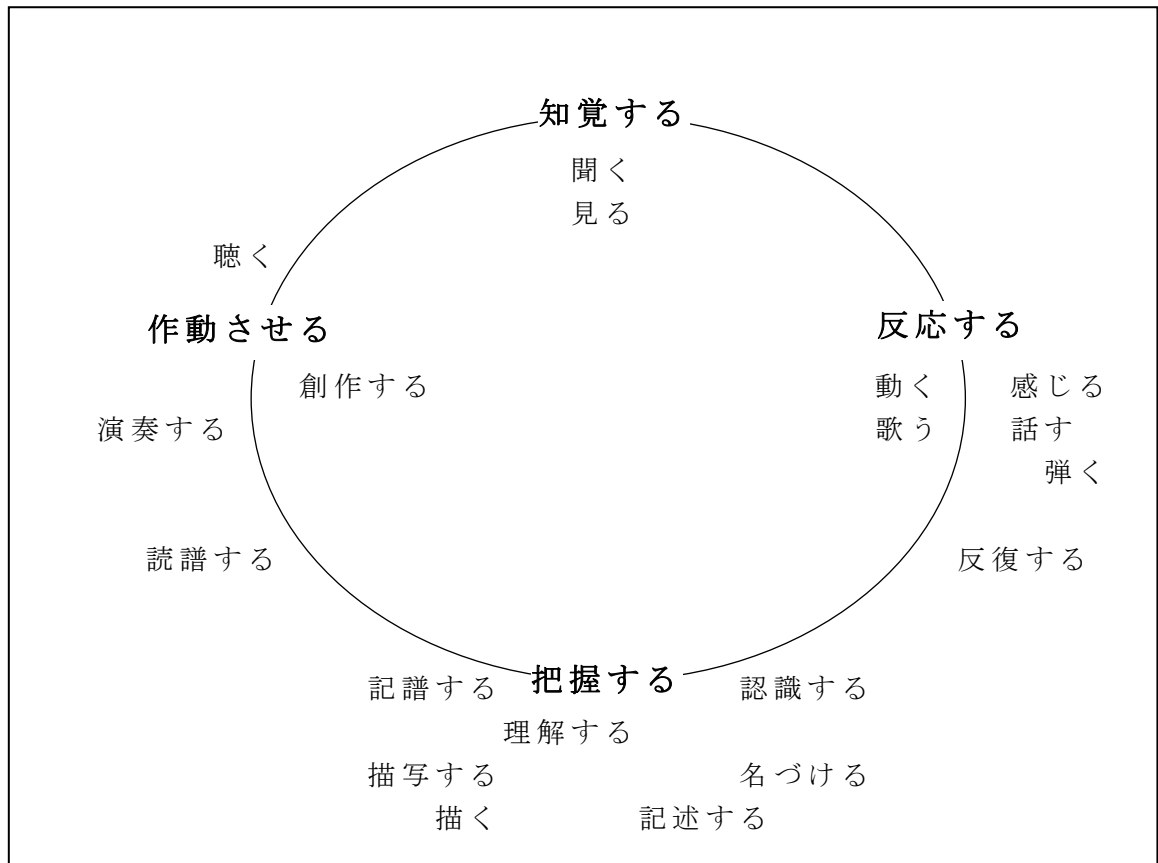
A(2) ア 範奏を聴いたり，リズム譜などを見たりして演奏すること。

音楽表現では，音符が必要であり，その読譜や記譜ができることが必然となる。第 1 学年から無理なく読譜や記譜をさせることにより，音符に抵抗なく将来にわたって音楽活動ができるようになるを考える。

⑤ 段階的な指導について

神原は、小学校における音楽の授業で、子ども一人ひとりに次のような機会を与えるものでなければならない、と述べている。

- 知覚と理解によって強化された聴き方を通して、音楽を親しむこと
 - 歌うこと、動くこと、器楽演奏することにおいて、アイディアやフィードリングを表現すること
 - 様々な時代、場所、人々の音楽から抜き出された実例に慣れ親しむこと
- 次の図は、小学校の児童たちを対象に、音楽的教養の獲得へとつながる活動と関与の連続する環を示したものである。



児童に限らず音楽学習者は、音を知覚することと聞くことから始められ、その後、児童は何らかの方法で反応し、心が理解することをほんの少し把握し始めると、自分自身の音楽(性)を、演奏、即興、あるいは作曲のいずれかによって働かせたり創りだしたりできる状態になる。演奏や創作を通して味わった満足感は、児童がより鋭敏な耳で聴くきっかけを生む。その時点で、学習は再びこの環をたどり始める。この環にリストアップされた活動は、音楽教養を発達させるために必要な、多様で連続的な関与の一例を示している。⁸⁾

よって、知覚→反応→把握→作動の環をたどるように授業を段階的に構成していくことで、児童の音楽の能力を高めていくことができる。

(2) 主題に迫るために

① 基礎的な音楽表現の能力を身に付けるための具体的なリズム活動

ア 興味をもち、楽しみながらリズムを感じ取ることのできる教材の工夫

(ア) 名前呼びゲーム

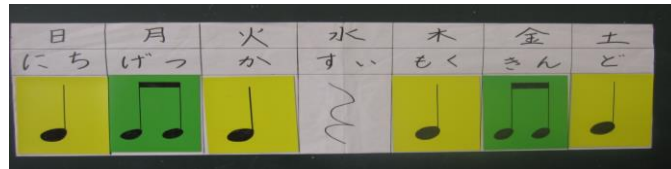
みんなで輪を作り，椅子に座る。「〇〇さん」「はあい」と，4 拍目に四分休符を入れた 2 小節 8 拍を一人分として，手拍子をしながら相手の名前を呼び，呼ばれた児童は返事をする。始めは教師対児童，次に隣の人の名前を呼び，慣れてきたらランダムに呼ぶようにしていくと，夢中になって楽しく活動することができる。

(イ) 果物リレー

みんなで輪になって座り，手拍子をしながら「(1 人) りんご」「(全員) はい」→「(1 人) バナナ」→「(全員) はい」と，4 拍子のリズムでリレーをする。リズム感を養うとともに，「はい」ということで全員のテンポを整えることもねらいとしている。

(ウ) リズムカレンダー

一週間分のカレンダーを黒板に掲示する。「日月火水木金土」と唱えながら手拍子で四分音符，八分休符，四分休符を打ち，音符，リズムに慣れさせる。最後の 1 拍分は四分休符で間合いをとる。(資料 1 河原井孝浩氏実践の追試) 9)



資料 1

イ 他教科と関連させた教材

国語科の教科書（光村図書）9)から

「うたにあわせて あいうえお」

あかるいあさひだ あいうえお
いいこといろいろ あいうえお
うたごえうきうき あいうえお
えがおでえんそく あいうえお
おいしいおむすび あいうえお

例			
あか	るい	あさ	ひだ
タン	タン	タン	タン
あい	うえ	お	
タン	タタ	タン	休符

上の詩は第 1 学年国語科の教科書に掲載されている詩である。これを四分の四拍子 2 小節でカウントし，みんなで唱えたり，手拍子でいろいろなリズムを作ったりして遊ぶ。また，「あいうえお」の 3 拍目で友達と両手でタッチする，1，2，3 拍目で友達とタッチするなど，様々なパターンで友達と手を合わせて楽しむ。

② 表現の基礎を養うための記譜指導

ア 音符，休符の名前を覚える。

音符，休符の名前も，四分の四拍子のビートを電子ピアノで鳴らし，そのビートに乗って，フラッシュカードを提示しながら「これなあに」「四分音符」と質問し，それに答えるというように掛け合いをし，楽しく覚えられるようにする。

イ 音符なぞり書きシート（資料 2）

読譜，記譜は難しいと敬遠されがちであるが，漢字の学習と同じように，一つ一つ丁寧に学習する。児童は，リズムカレンダーで読譜に慣れてきているので，自分も音符を書きたい，という気持ちが高まっている。

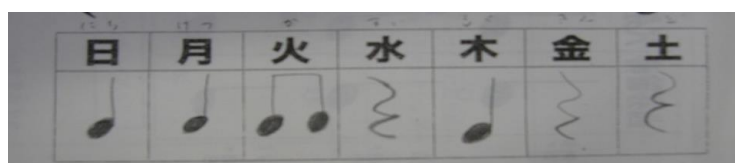
音符なぞり書きシートを使用し，①空書き②指書き③なぞり書き④写し書きの順で音符を書く練習をする。

ウ リズムカレンダー（資料 3）

学習した音符，休符を使い，リズムカレンダーを作る。できたら叩いてみて，随時修正するように声かけをすることによって，児童の発想を生かすことができる。



資料 2



資料 3

③ お互いに表現力を高めるための学習活動形態の工夫

ア ペア学習でのリズム遊び

作ったリズムを隣の児童と両手を合わせて手拍子する。正確に演奏できているかをお互いに確認できるとともに，2 人のリズム打ちを合わせることで，できた喜びや達成感を味わうことができる。

イ グループでリズムカレンダー作り

4～5 人のグループを作り，自分のリズムを持ち寄って，8 週間分のリズムカレンダーを作る。2 人のリズムを組み合わせた，全員のリズムを同時に演奏したりして，バリエーション豊かなリズムの音楽づくりをする。どのように組み合わせるかを考え，話し合うことで，思いを伝えたり，聞いたりすることができる。話合いを進めるうちに，足踏みで音を出したい，椅子の座面を叩きたい，という思いや音へのこだわりをもつことができる。（資料 4）



資料 4

5 授業の構想

題材名 じぶんのリズムをつくろう（第 1 学年）

（1）題材設定について

1 学年の児童にとって初めての音楽づくりになるので，簡易なものを繰り返して変化をつけて提示することで，リズムに慣れるようにしていく。また，模倣したり，一定の条件を設けたりすることで，つくることへの作業がスムーズにいくように配慮したい。

（2）〔共通事項〕の内容，取り上げ方

ここでは，リズム遊びを通して，誰もが四分音符，四分休符，八分音符を使

用してリズムをつくることを条件としてつくるように設定する。

強弱記号については、初めての楽器の使用であるので、手や足踏み、あるいはカスタネットや太太鼓など、選んだ楽器によって音の大きさが違ってくことを利用して、強弱について児童に気付かせ、思考判断して演奏させるようにしていきたい。

(3) リズムづくりについて

名前遊び、リズム遊びなどを通してリズムに慣れさせ、自分でリズムをつくりたいという気持ちになるようにウォーミングアップしておいてから、リズムづくりをするようにしていく。リズムは、四分音符、四分休符、八分音符を必ず使用して作ることを条件とし、黒板にリズムのパターン例を掲示し、作りやすいように或いは組み合わせやすいようにしておく。

(4) グループ学習について

個人学習 $\longleftrightarrow$ ペア学習を基本とし、個人で活動したらペアで確認し、演奏したり、話し合いをしたりする。自分の作ったリズムを友達に知らせることにより、自己表現する楽しさを感じたり自己実現することの喜びを感じたりすることができる。また、自信のないところは、友達と学び合うことにより、わかるようになったり、できるようになったりする効果がある。また、自分のつくったリズムを友達と演奏することにより、共有する喜びを感じることができる。

次の段階として、できたリズムを4～5人のグループでつなぎ合わせたり、重ね合わせたりする。短い個人のリズムを友達とつなげることで、長いリズムをつくることができ、楽しさが増し、工夫できるところも増える。

(5) 学習指導案

学習指導案

1 目標

- リズム視唱、言葉のリズムなどに興味をもち、進んで聴いたり拍の流れにのって表現したりしようとしている。(音楽への関心・意欲・態度)
- リズムの変化や言葉のリズムのおもしろさを感じ取りながら、拍の流れにのって表現の仕方を工夫している。(音楽表現の創意工夫)
- 範奏を聴いたりリズム譜を見たりして、拍の流れにのって打楽器を演奏している。(音楽表現の技能)

2 題材設定に当たって

1学年の児童にとって初めての音楽づくりになるので、簡易なものを繰り返し変化をつけて提示することで、リズムに慣れるようにしていく。また、模倣したり、一定の条件を設けたりすることで、リズムをつくることへの作業がスムーズにいくように配慮したい。

3 指導計画と評価の計画

時	ねらい	主な学習活動	評価の観点				評価基準
			関	創	技	鑑	
1	四分音符、八分音符、四分休符のリズムに慣れ、自分のリズムをつくろう	「リズムうちをしよう」	○		○		(関) リズムに興味をもち、進んで聴いたり、表現したりしようとしている。
2	「おんぶをかこう」				○		(創) リズムの違いや言葉のリズムのおもしろさを感じ取りながら、拍の流れにのって表現の仕方を工夫している。
3	に慣れ、自分のリズムをつくろう	「○○りずむをつくろう」		○			(技) 範奏を聴いたりリズム譜を見たりして、拍の流れにのって歌ったり打楽器を演奏したりしている。
4	(本時) りずむをつくろう	「くろうがで○○りずむをつくろう」		○			
5	ができる。	「はっぴょうかいをしよう」			○		

4 本時の学習

ア 目標 リズムづくりに取り組み、リズムや順番の組み合わせを工夫している。

(音楽表現の創意工夫)

イ 準備・資料 リズムカレンダー(掲示用、個人用、グループ用)、音符マグネット

5 展開

学習内容・活動	教師の働きかけ	評価
1 児童のつくったリズムで手拍子を打つ。	・楽しい雰囲気を作り、学習への意欲を高めるようにする。	・児童が作った様々なパターンリズムを掲示し、リズム打ちをして、次の活動が無理なく進められるようにする。
2 本時の学習課題を確かめる。	くろうがで○○りずむをつくろ	・自分たちのオリジナルのリズムを作ること知らせる。
3 ○○リズムを作る。	・グループで、自分のリズムを発表する。	・うまくリズム打ちができない児童には、一緒に打ったり、掛け声をかけたりして、支援する。
・どのように演奏するか、話し合い、演奏順を書く。	・グループで重ね合わせたリズムを練習する。	・どのリズムを重ねるとよいか、組み合わせを替えて練習するように助言する。
・できたリズムの名前を決める。	・グループ間を回り、それぞれのリズム打ちについて短く評価する。	・手拍子だけでなく、足踏みを入れたり、お尻を叩いたりしてもよいことを伝える。
・よりよい表現になるように工夫する。		リズム作りに取り組み、リズムの組み合わせを工夫している。 (音楽表現の創意工夫・活動の様子、発言の内容、児童との対話、リズムカレンダーの記述)
4 本時のまとめをする。		・学習の振り返りをし、次時の活動への意欲付けにつながるようにする。

6 研究のまとめ

(1) 音楽活動の基礎的な能力の向上

名前呼び遊び、果物リレー、リズムカレンダー、というように、段階的なリズム表現、音楽づくりの一連の活動を行うことによって、児童が興味関心をもち、楽しみながら学習することができる指導法を考察し、明確にすることができた。

また、[共通事項]を音楽活動の流れの中に効果的に取り入れ、無理なく基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせることができる指導法を考察することができた。

この方法を進めていけば、誰もが読譜や記譜をすることができ、楽しみながら音楽づくりを行うことができる。また、指導者の読譜、記譜の指導の難しさ、音楽づくりについての迷いを払拭することができる。さらに、児童は自分で作ったリズムを、思いをこめて演奏することで、音楽表現の楽しさを感じることができ、表現の能力を高めることができる。

(2) 基礎的な表現の能力を高め合う学習形態の工夫

毎時間ペア活動、グループ活動を通して学習することにより、友達と確認し合ったり、作ったリズムのよさを話し合ったりすることができる。また、どのようにしたらよいリズム表現ができるかを話し合うことで、自分の思いを伝えるとともに、相手の意見を取り入れて、納得する作品づくりをすることができる。

7 今後の課題

(1) さらなる「共通事項」と関連した題材の設定

本研究では、リズムに重点を置いて追究し、リズムをつくって演奏することを研究した。今後は、それに旋律を重ね、さらに音色や速度、強弱などに関連させることのできる題材の設定を追究していきたい。

(2) 感性豊かに音楽を感じ取る児童の育成

本研究では、手拍子や言葉遊びを中心とした音楽表現であったので、今後は、様々な楽器を用い、奏法を身につけるとともに、音やリズム、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みなどに気づき、感性豊かに感じ取ることができる児童の育成を図れる研究を追究したい。

〈引用文献〉

1) 6) 7) 文部科学省

『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成 20 年 8 月』教育芸術社(2008)pp:7,9,22,25

2) 8) 神原雅之・板野和彦・山下薫子

『ジャック＝ダルクローズによる子どものための音楽授業』ふくろう出版(2006)p:18,19

3) 今村央子・酒井美恵子

『動いてノって子どもも熱中！リトミックでつくる楽しい音楽授業』明治図書(2012)p:12

4) 5) 井上恵理・酒井美恵子

『楽しくつくるアイデア満載！「音楽づくり」成功の授業プラン』明治図書(2012)p:8,11

9) 『こくごー上かざぐるま』小学校国語科用 光村図書出版 平成 22 年検定済(2013)p:14,15

〈参考文献〉

・L.チョクシー/A. ガレスピー/D. ウッズ

『音楽教育メソッドの比較』全音楽譜出版社(1994)

- ・井上恵理・酒井美恵子
『動いてノッて子どもも熱中！リトミックでつくる楽しい音楽授業』明治図書(2012)
- ・金本正武・坪能由紀子
『ポイントと授業づくり 音楽』東洋館出版社(2009)
- ・小林田鶴子・時得紀子・内海昭彦
「表現力を高める音楽づくり』についての一考察」名古屋女子大学研究紀要 57(2011)
- ・新三王政和
『新しい視点で音楽授業を創る！－新学習指導要領を先取りした実践方法』スタイルノート(2010)
- ・高須一・金本正武
『小学校音楽科の音楽づくり 低学年編』明治図書(2005)
- ・高須一・金本正武
『小学校音楽科の音楽づくり 中学年編』明治図書(2005)
- ・高須一・金本正武
『小学校音楽科の音楽づくり 高学年編』明治図書(2005)
- ・高山仁
『みんなで音楽 「生きる力」はぐくむ音楽活動』音楽の友社(2010)
- ・坪能克裕・坪能由紀子・高須一・熊木眞見子・中島寿・高倉弘光・駒久美子・味府美香
『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』音楽の友社(2012)
- ・宮崎 幸次
『新装版 カール・オルフの音楽教育－楽しみはアンサンブルから』スタイルノート(2013)

研修を終えるにあたって

茨城大での 3 か月間の研修は、これまでの自分の教育活動についてふり返るとともに、今後自分が進むべき音楽教育の方向性を見つめ直す、大変貴重な機会となりました。数多くの文献や専門書にふれたり、講義を拝聴させていただいたり、研究会に参加させていただいたりするなど、職場では体験できない幅広い研修をすることができました。

今後は、この機会に得た成果を現場での教育に生かし、子どもたちにより充実した指導を展開していけるよう努力してまいりたいと思います。

この研修を進めるにあたり、指導教員である茨城大学の藤田文子先生をはじめ、音楽科の諸先生方には、公私共にご多忙にもかかわらず、温かいご指導やご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、共に学ばせていただいた大学院生の皆さんにも深くお礼申し上げます。

最後になりましたが、このような貴重な研修の機会を与えてくださいました茨城大学、県教育庁義務教育課、水戸教育事務所、水戸市教育委員会の各先生方、そして水戸市立堀原小学校の石井誠二校長先生をはじめ、諸先生方に心から感謝申し上げます。